

『 地域包括ケア構築に向けた大田区の現状と、ネットワークの可能性 』

平成24年度より始まった、大田区の地域の見守り体制構築に向けた推進事業の展開

大田区では、平成24年度より、地域の見守り体制構築に向けて、地域包括支援センターを核とした推進事業を展開しています。

具体的には、平成21年8月「おおた高齢者見守りネットワーク（みま～も）」の専門職たちが生み出した「SOSみま～もキーホルダー登録システム」を、平成24年4月から「大田区見守りキーホルダー登録事業」としてスタート！

まだ包括支援センターを必要としていない元気なうちから、キーホルダーの登録を通して、包括支援センターとつながるシステムをつくりました。

もうひとつの具体化は、平成24年6月より、各地域包括支援センターに「高齢者見守りコーディネーター」を常勤配置をしたことです。

「見守りコーディネーター」は、積極的に地域に出向き、高齢者と関わる個人、団体、機関等の情報を流れやすくし、地域の方と連携した、高齢者を見守る体制づくりを進める核となる職員。高齢者を1件1件訪問し、実態把握をするという実働職員ではなく、地域にある機関、団体、個人とつながり、高齢者を見守っていくためのコーディネートのために人員を配置したのです。

8月現在、20ある地域包括支援センターの中で、14の包括支援センターが、見守りコーディネーターに社会福祉士を配置しています。

地域包括支援センターが形作るネットワークの本質とは

改めて地域包括支援センターの本来の機能は、そして役割は何なのか？このことを踏まえた地域包括支援センターが形づく見守りネットワーク構築について考えました。

地域包括支援センターへの期待が大きい地域づくり（ネットワーク構築）……。しかし現状の中で、多くの地域包括支援センターが ネットワーク構築に向かえない要因は何なのか？

- ・時間や労力がかかる、成果を明らかにしにくい。
- ・母体法人の理解。
- ・人員体制の問題・介護予防プラン業務等、日常業務に追われていて、思いはあっても実行に移せない。

それでも「ネットワーク構築のために！」と、多忙な業務の中、自治・町会の集まりなどに積極的に参加し、地域包括支援センターについての周知に力を込める。しかし、この地域への協力の呼びかけ や、地域包括支援センターの周知 というのがじつは曲者……。

このような一方的な呼びかけや周知というものは、「何かあったら、とりあえず地域包括支援センター！」という図式ができるだけ。住民は、「地域包括支援センターにおまかせ！」。

このような周知や協力の呼びかけの方向で、ネットワーク構築というものを進めていくのであれば、努力すればするほど業務が回らなくなり、自分たちの首を絞めていく……。そうなりかねない。

それだけではありません。多忙な業務の中、ネットワーク構築に足を踏み出した包括支援センターが、ネットワーク構築＝大変 という実感だけを残し、意気消沈。ネットワーク構築に向かいだしたものの自然消滅……。これでは誰もいいことはありません。地域に暮らす人たちにとっても、地域包括支援センター職員にとっても……。

『本来サービスが必要だが、自分ではサービス利用までたどり着くことができない、SOSの手を自ら挙げることのできない人たちをどうするか？』この命題に近道はないんです。

「SOSの手を自ら挙げることのできない人たちをつくらないこと！」この視点から、地域包括支援センターが形づくるネットワーク構築を考えていくことが重要なのだと思います。

私たちが、手をつなぎ合う自治会・町会、民生委員、商店街組合……。じつは、どの団体も高齢化が進んでいる。地域での役割を持ってくれる方々も、大部分が65歳以上！私たちが対象とする一次予防対象者！つまり、見守り体制を構築することに関わる人が増えていくこと＝地域の中で社会的役割を持ち、暮らしていく人が増えていくということ。「介護予防」、「住み慣れた地域で元気に……！」、これに必要なことは、体操・運動・外出が全てではないはず。社会的な役割を持ち続けていくことの重要性、これこそが大事なんです。この社会的役割を、ネットワーク構築に活かしていく。この視点を持てば、介護予防の取り組みとネットワーク構築がひとつに重なり、一石二鳥！

私思うんです……。

地域包括支援センターが向かうネットワーク構築に必要なものは、マニュアルではなくネットワーク構築に向かうための視点！「SOSの手を自ら挙げることのできない人たちを、もうここからはつくらない！」という視点に立ちきる。これを進めていくためには、自分たちだけでは無理！だ・か・ら、地域に具体的に協力を求めていくんです。

具体的に地域住民と話し合っていくためには、話しが具体的になるためのツールが必要です。このツールを大田区は、地域に暮らす人たちが必要と感じてくれているキーホルダー登録システムや、地域づくりセミナーだと考えています。このツールなら、友人や近隣の人に声をかけやすい。それだけではありません。ツールを地域に広げていくという共通課題で、自治・町会など、地域のさまざまな団体とも具体的な話しになっていく。

地域の中の関係性から、適切な時期に私たち専門職につながる仕組みをつくる。このネットワークが、視点が機能すれば、私たちの業務は本来の専門性を生かした形になるはず。です。

ネットワーク構築は、何のためにやるのか？私は、本来自分が持っている専門性に立った仕事地域包括支援センターでできるためにやっている。地域包括支援センターが担うのは、実働部隊ではなくコーディネート機能！そこにネットワーク構築の発想の視点を持ちたいと思います。

今なぜネットワークなのか？ネットワークの利点とは……

なぜネットワークが重要なのでしょう。なぜ、今ネットワークなのでしょう……。ネットワーク組織の利点、および組織間連携によりもたらされる利点は何なのでしょう？？

私は、ネットワークの重要性、利点をこう考えています。

- ① ひとつの組織が有する人的、財的、その他の技術的な資源だけではでき得ない事業や取り組みが多々あります。自組織にはない資源や能力をもつ組織とネットワーク組織を組むことで、新たな事業が可能となり、また自組織だけでは達成できない目的の達成や課題の解決が可能となる。
- ② ネットワーク組織により得られる効果の一つに、「学習効果」があります。特に、参加組織間のメンバーが交流することにより、各組織の専門的な技術や知識を習得できる。
- ③ ネットワーク組織による規模の拡大や組織力の向上により、ネットワークに参加している組織は、社会的地位の向上や信頼を確保することができる。
- ④ 活動費の抑制や運営の効率化もネットワークがもたらす利点の一つ。
例えば、複数の事業所（例えば隣接する地域包括）と講座やイベントを共同開催することにより、運営費やその事業に関わる人員を抑制することができる。
さらに、普段は得ることができない多組織のスタッフから新たなアイデアを得ることにより、事業をより効率的におこなえる可能性が生まれる。
- ⑤ ネットワークの最大の効果はシナジー効果（相乗効果）です。
シナジー効果とは、簡単に言えば「1 + 1」が単純に2というよりも、2よりも大きな効果を得ることができるということです。二つの組織が合わさることで、互いの組織のもつ利点をそれぞれ1つずつ合わせて2つの効果があるというだけでなく、そこから派生または付随する効果がどんどん増えていきます。

おおた高齢者見守りネットワーク（みま～も）から学んだネットワークの発展過程

平成20年4月、私たち大田区地域包括支援センター入新井が、地域にある医療・介護事業所、企業に協力を呼びかけ発足した「おおた高齢者見守りネットワーク（みま～も）」は、4年半を歩んできました。

1年目は、地域に暮らす人たちに、近隣の異変に気付くための気付きの提供を目的に、毎月第3土曜日に「地域づくりセミナー」を開催。今では毎回100名の参加者が集います。

2年目には、このセミナーを通して、近隣の200床以上の病院 医療ソーシャルワーカーと、医療の安心につながるシステムづくりに着手。「SOSみま～もキーホルダー登録システム」を生み出しました。

3年目からは、もっと身近に、日常的に地域住民と出逢える場、「みま～もステーション」事業をスタート。地域にある商店街の空き店舗に、みま～もの拠点が誕生！年間100ほどの各講座に地域住民が集まり、住民同士、医療・保健・福祉専門職とのつながりを深めています。

会発足当初、協賛4事業所からスタートした当会は、現在70の協賛事業所・企業の方々が、地域づくりにそれぞれの得意分野を発揮しながら協力してくれています。

活動を通して、私自身が学んだネットワークの発展過程に欠かせない3要素は、

- 目的が明確なこと。

- ・ つねに、新しい組織が入りやすいオープン性を持っていること。
- ・ そして、組織がみま～もの趣旨を理解して、組織として参画することを基本としていること。
組織が大きくなる中で大事にしてきたことは、「お客さんをつくらない！」ということ。
そのためには、取り組みに具体的に関わってもらい、実感として会を理解し、つくり手になっていく人を増やすことが重要です。たとえば、100名が関わっている組織で、10名いればできてしまう取り組みをしていたとしたら、90名のお客さんをつくってしまう。組織力というのは、どれだけの人がかかわり、実感として理解し、主体的に関わっているのかで育まれていくものだと思っています。

20名いたら、20名みんなが関わることのできる取り組みを考える。50名なら50、100名なら100名が力を合わせるからできることを考えるんです。

一部の力のある人ががんばっている組織というのは、多くの受身なお客さんをたくさん生み出し、一部の力のある人たちもそのうち疲弊していく。一部のできる人でこなそうとするから、新しい力は生まれず、組織内に新鮮な血が巡らない。何より、関わっている人のどの人も楽しくなれない！楽しくないから豊かさも生まれない……。

誰でもそう……。明確な目的があるから、そこに向かってがんばることができる。目的に向かうための目標が明確であるから、多くの人が集う。目的は、できれば今ある自分では、組織では手が届かない……。だけれども、他の人、団体と協力し合うことでつかむことができる！そんな目的がいい。今の自分でやれてしまう目的であれば、他の人に目が向かうことはないですから……。目標は、実感できるものもいい。それが前に進む力となるやりがいいにつながる……。やりがいいこそが、継続につながるんです！

『見守り・支え合い、孤独死をなくす！』

大切なことです……。大切だからこそ、一時の盛り上がりではなく、息長く継続していくことが必要なんです。『生活』とは、一部が満たされて充足するものではなく、もっと全体的なもの。生活に根ざしたもの。

そうであるからこそ、その地域に暮らす、働く、あらゆる人たちが顔を合わせ、描いていくものなんです。地域のあらゆる社会資源、人、団体、機関、企業が、生活を全体的なものにするためにつながる必要があるのです。だから、ネットワークなのだと思うのです。そして、生活に根ざした場があちこちに生まれる。一つの箱物（施設等）を作るよりも、生活に根ざした場が地域のあちらこちらに、縦横に生まれることの方が大事だと思っています。それは、大きな視点で町づくりにつながっていくのだと思います。

おおた社会福祉士会の皆様、今、このような時代の流れの中で、多方面、他分野でご活躍している社会福祉士一人ひとりの力を、大田区も、地域包括支援センターも、そして地域も求めています。社会福祉士として、これからの大田区のネットワークのあり方を、実践を通して築いていきましょう。